

平成 30 年度奈良市アートプロジェクト
「古都祝奈良 2018-2019」

実績報告書



平成 31 年 3 月

奈良市アートプロジェクト実行委員会

目 次

1.	はじめに	1
2.	事業概要	2
3.	奈良市アートプロジェクト実行委員会について	3
4.	美術部門について	5
5.	演劇部門について	20
6.	事例発表と意見交換会 ～わいわい語ろう アート de 奈良～	27
7.	広報活動について	29
8.	検討と課題	32

《資料編》

(1)	平成 30 年度事業 参加者数等まとめ	36
(2)	平成 30 年度事業計画	37



1. はじめに

奈良市では平成 28 年に取り組んだ国家プロジェクト「東アジア文化都市 2016 奈良市」において、古都奈良に現代アートの息吹を吹き込むという、大きなチャレンジに挑みました。特にコア期間「古都祝奈良」では、社寺やならまちなど「場の力」を背景としたプログラムを展開しました。この事業の成果を持続的に生かしていくために、平成 29 年度から「古都祝奈良」の名称を継承し、この 2 年間は美術と演劇の二部門による構成でアートプロジェクトを実施しました。

2 年目となる今年度は特に、対話によるプログラムを加えることによって、今までとは違ったアートへのアプローチを試みました。年間 7 回にわたって実施した対話による学び合いのプログラム「グリーン・マウンテン・カレッジ」は、アートに対する既存のイメージをどこまで変容させることができるかに取り組みました。

このプログラムでは既成概念にとらわれず、柔軟な視点から、通常とは異なる入口から入ることとしました。ゲストとして参加いただいた方々の専門は多岐にわたり、アートに接するためのハードルを極力低いものとする中で、誰もが入りやすいプログラムとしました。そして、その過程での「気付き」「学び合い」をアートとして位置づけようとしたのです。

今年度の取り組みは、このような手法でアートを扱うスタートプログラムであり、これから継続的に実施していくことで理解が深まっていくものと考えられます。これからも「古都祝奈良」はアートの意義を問い続けながら、文化の多様性を創造力へとつなげることを目指し実施します。

2. 事業概要

奈良市アートプロジェクト「ことほぐなら古都祝奈良 2018-2019」

期間 平成 30 年 10 月 13 日（土）～平成 31 年 3 月 17 日（日）

会場 ならまちセンター
JR 奈良駅東口駅前広場
奈良国立博物館
奈良公園浮雲園地
なら 100 年会館
鳥見“ふらっと”まんま
奈良町にぎわいの家

主催 奈良市アートプロジェクト実行委員会
奈良市

後援 奈良県
奈良県立大学

協力 奈良国立博物館
青年団
田上パル

平成 30 年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

3. 奈良市アートプロジェクト実行委員会について

平成 28 年 12 月に「奈良市アートプロジェクト実行委員会」を立ち上げ、下記のメンバーにより実行委員会を構成しています。

奈良市アートプロジェクト実行委員会

分野等		所属/役職	氏 名
副委員長	東アジア文化都市	東アジア文化都市 2016 奈良市実行委員会/委員 同志社大学/特別客員教授	佐々木 雅幸
	文化振興計画	奈良市文化振興計画推進委員会/副委員長 大阪樟蔭女子大学/教授	萩原 雅也
委員長	行政	奈良市長	仲川 げん
		奈良市教育委員会/教育長	中室 雄俊
	監事	税理士	青木 幸子

(順不同・敬称略)

今年度は下記のとおり 2 回の会議を開催しました。

実行委員会の経過

◎第 1 回奈良市アートプロジェクト実行委員会

日時 平成 30 年 5 月 21 日 (月)

内容 事務局から平成 29 年度事業報告と決算報告を行い、平成 30 年度事業計画及び予算について議論をし、主に下記の点について合意に至りました。

- ①平成 30 年度も「古都祝奈良」の名称のもと、美術部門（西尾美也プログラムディレクター）、演劇部門（田上豊プログラムディレクター）の事業を実施する。
- ②美術部門は、チェ・ジョンファ氏によるプログラムと「グリーン・マウンテン・カレッジ」と銘打ったアートスクールにてワークショップやアートディスカッションを展開する。
- ③演劇部門は、平田オリザ氏のワークショップの継続実施、青少年と創る演劇「ならのはこぶね」を再演する。
- ④他事業（東アジア文化創造 NARA クラス）、他組織（市教育委員会、第 69 回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会）とのますますの連携強化を図る。

◎第 2 回奈良市アートプロジェクト実行委員会

日時 平成 30 年 7 月 19 日（木）

内容 事務局より平成 30 年度事業計画について、プログラムの詳細について説明を行いました。特に新たなプログラム「グリーン・マウンテン・カレッジ」の日程やゲスト、内容などについて概要を説明し、意見交換を行いました。

委員からは、

- ・継続事業とするならば、事業全体として、5 年、10 年程度の中長期的な効果目標設定や成果としての文化や人材の蓄積ができていないかを見て行かねばならない。
 - ・美術部門と演劇部門の連携が必要である。
- などの意見が出されました。

4. 美術部門について

■ チェ・ジョンファ氏による作品制作・ワークショップ

美術部門プログラムディレクター西尾美也氏のディレクションにより、昨年度も本プロジェクトに招へいし、市内各地で“花ーWelcome”と題する作品を制作した韓国人アーティスト、チェ・ジョンファ氏を再び招へいし、“花の舍利塔 Blooming Matrix”と題した作品制作ワークショップ、作品展示、保育園へのアウトリーチによるワークショップを行いました。

(1) 作品制作ワークショップ・作品展示プラン作成のための視察

2018年7月18日から22日までチェ・ジョンファ氏を招へいし、ワークショップ・作品展示のプラン作成のための視察を行いました。

- 7月18日(水) 午後 プログラムディレクターとの打ち合わせ
- 7月19日(木) 午前 リサイクルショップやホームセンターにて素材の探察
午後 プログラムディレクターとの打ち合わせ
- 7月20日(金) 午前 奈良市内視察(リサイクル推進課大安寺分室、大安寺)
奈良市役所にて打ち合わせ
午後 奈良市内視察(興福寺、奈良県立大学)
- 7月21日(土) 終日 奈良県内視察(石上神社、天理市内の鉄くず取扱業者)
リサイクルショップやホームセンターにて素材の探察
- 7月22日(日) 午前 奈良市内視察(なら100年会館)

▼視察の様子



リサイクル推進課大安寺分室での素材の探察



ホームセンター・リサイクルショップでの素材の探索

開催候補場所を視察し、素材を探索し、帰国後も引き続きチェ・ジョンファ氏と協議を重ねた結果、奈良国立博物館にてワークショップと作品展示、その後、なら 100 年会館に作品を輸送して展示を実施するプランと大まかな施工方法が提案されました。

ワークショップ・作品展示プラン：

会場名	タイトル	仕様
奈良国立博物館 (新館前北側通路)	《花の舍利塔 Blooming Matrix》	新旧の食器や調理道具、食卓などを積み重ねて、46 個の塔をワークショップ参加者と共に制作する。設置方法は、マンホールやコンクリート製の束石を土台にして、ステンレス製の支柱を立てて、ドリルで穴をあけた調理器具や食器等をその穴に通す方法を採用。翌日まで展示をする。
なら 100 年会館 (2 階正面バルコニー)	《花の舍利塔 Blooming Matrix》	上記のワークショップ作品をトラック(2t)2 台にて運送し、同方法にて設置。

(2) ワークショップの実施と作品展示

2018年11月15日から20日まで、チェ・ジョンファ氏を奈良市に招へいし、3つのプログラムを実施しました。

① 作品制作ワークショップ

日時 11月17日(土) 14:00~16:00

場所 奈良国立博物館新館前北側通路

内容 食器や調理道具を使ったワークショップを実施し、約350人の参加者と共に作品「花の舍利塔 Blooming Matrix」を制作しました。家族連れなどの参加者が、チェ・ジョンファ氏のアドバイスを受け、楽しみながら食器を積み上げ、開始後1時間余りでほとんどの作品が完成しました。

《作品の趣旨》

食べることは昔も今も変わらずに人間が続けてきた基本的な営みです。そのために人間が生み出してきたさまざまな道具を、チェ・ジョンファ氏は「枯れない花」と言います。それらの「花」が積み重なって咲き誇り、「花」に祈りを捧げること、またその行為を参加者と共有し、我々自身もまたそこに立つ塔＝マトリックス（ものごとの基盤）であることに思いを馳せます。

▼作品制作ワークショップの様子



②作品展示（2箇所）

▼作品展示1の様子

日時 11月17日（土）ワークショップ終了後～11月18日（日）

場所 奈良国立博物館新館前北側通路

内容 ワークショップで制作した作品を翌日まで展示しました。
市民はもとより、奈良公園を訪れる国内外の観光客が興味深く鑑賞しました。



▼作品展示2の様子

日時 11月20日（火）～11月29日（木）

場所 なら100年会館 2階正面バルコニー

内容 ワークショップで制作した作品をなら100年会館に移送し、チェ・ジョンファ氏の監修の下、正面バルコニーに展示しました。なら100年会館の来場者が作品鑑賞を楽しみました。



【ワークショップおよび作品展示 来場者数】 11月17日～11月29日 計10,781人

ワークショップ 11/17	作品展示1 11/18	作品展示2 11/20～29
奈良国立博物館 新館北側通路	奈良国立博物館 新館北側通路	なら100年会館 2階正面バルコニー
341人	1,916人	8,524人

(3) アウトリーチ活動

日時 11月19日(月) 10:00~11:30

場所 奈良市立富雄保育園

内容 富雄保育園の園児(5歳児24人)が、チェ氏が世界各地で制作した作品の映像を見た後、チェ・ジョンファ氏とのコミュニケーションを楽しみながら、カラフルなプラスチックキャップやザル、フラフープを床に並べて、思い思いの花を咲かせました。日頃とは違った側面を見せる子どももあり、アートの可能性を物語るワークショップとなりました。最後にはチェ・ジョンファ氏は子どもたち一人ひとりから作品の説明を聞き、握手をして別れを惜しみました。



【アウトリーチワークショップ 参加者数】 富雄保育園 5歳児 24人

■グリーン・マウンテン・カレッジ

このプログラムは美術部門プログラムディレクター西尾美也氏を通じて、京都市立芸術大学教授の小山田徹氏から提案されました。1933年アメリカのノースカロライナに開設され、1957年に閉校した伝説の芸術学校「ブラック・マウンテン・カレッジ」に着想を得たもので、共有空間の獲得をめざす対話のプログラムとして全7回実施しました。小山田氏には事業の企画者として本校校長を担っていただきました。毎回違うゲストを招き、それぞれのゲストが取り組んでいる様々なジャンルのテーマについて話を聞いた後、参加者が「火」を囲みながら、自由に語り合いました。（本プログラムを奈良で実施するにあたり、若草山の緑を意識して、「グリーン・マウンテン・カレッジ」と命名しました。）

《スケジュール》

回	日時	「テーマ」	ゲスト	場所
1	10月13日（土） 17:00～20:00	開校式 「火床を創る」	小山田徹	ならまちセンター 芝生広場
2	10月21日（日） 17:00～20:00	「男女と色恋」 山田創平×あかたちかこ×小山田徹		JR 奈良駅東口広場
3	11月17日（土） 17:00～20:00	「大きな食卓」 チェ・ジョンファ×小山田徹		奈良国立博物館 新館西側広場
4	12月1日（土） 17:00～20:00	「私はどこにいるの？ 地上編」 佐藤知久×小山田徹		ならまちセンター 芝生広場
5	12月16日（日） 17:00～20:00	「私はどこにいるの？ 天空編」 磯部洋明×松井紫朗×小山田徹		奈良公園 浮雲園地
6	2月2日（土） 17:00～20:00	「耳を澄ます」 sonihouse（鶴林万平・長谷川アンナ）×小山田徹		ならまちセンター 芝生広場
7	2月16日（土） 17:00～20:00	「繕う」 柴田美穂子×西尾美也×小山田徹		鳥見“ふらっと”まんま

《小山田 徹（こやまだ とおる）氏のプロフィール》



1961年鹿児島生まれ、京都府在住。美術家／京都市立芸術大学美術学部教授。京都市立芸術大学日本画科卒業。1984年大学在学中に友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。主に企画構成、舞台美術を担当し、国内外の数多くの公演に参加。ダムタイプの活動と平行して1990年から、さまざまな共有空間の開発を始め、コミュニティセンター「アーツスケープ」「ウィークエンドカフェ」「モモンカフェ」「祈る人屋台」「カラス板屋」などの企画を行う他、コミュニティカフェ「Bazaar Cafe」の立ち上げに参加するなど、さまざまな友人らと造形施工集団を作り共有空間の開発を行う。

▼各回の様子

第1回：10月13日（土）17：00～20：00（ならまちセンター 芝生広場）

開校式／「火床を創る」 小山田 徹（グリーン・マウンテン・カレッジ校長）

清々しい秋晴れの中、ならまちセンター前の芝生広場に二張りのティピーテントが出現しました。これが「グリーン・マウンテン・カレッジ」の象徴です。そして、薪ストーブが7台、その周りには椅子が並べられ、「グリーン・マウンテン・カレッジ」開校式の準備が整いました。薪ストーブに火がつき始めた頃、カレッジは校長小山田徹氏による挨拶で始まりました。このカレッジは1930年代にアメリカのノースカロライナで開設された伝説的な芸術学校「ブラック・マウンテン・カレッジ」に着想を得て発案された、人類はるか昔から毎日火を囲み様々な知恵を共有し合ってきたが、そういう空間が今わたしたちの生活では遠いものになっているからこそ、このカレッジを作ったという話がありました。徐々に暗くなり始め少し肌寒くなってくると火を囲む人の数が増えていきました。小山田氏の宮城県女川町での迎え火プロジェクトの話、子どもころ薪で五右衛門風呂を沸かした話、初めて町内会に入った話、隣の家解体工事の話なども語られました。入れ替わりたちかわり、多くの方が火を囲みひとときのおしゃべりを楽しみ、そこには自ずと共有空間が生まれました。



【第1回グリーン・マウンテン・カレッジ 参加者数】 50 人

第2回：10月21日（土）17：00～20：00（JR 奈良駅東口広場）

「男女と色恋」 山田 創平（都市社会学者）

あかた ちかこ（思春期保健相談士）

小山田 徹（グリーン・マウンテン・カレッジ校長）

カレッジの最初の“授業”は奈良の玄関口、JR 奈良駅前で始まりました。まず、ここ200年くらいの「家族」について考えてみることから。日本では戦後に「家族計画」という言葉が広まりましたが、子ども2人が理想的とされたこの思想はどこから生まれたものなのか？ 山田氏によれば、それには資本主義が大きく関わっていて、産業革命以後の近代の資本主義社会の下で、必要な労働力を安定的に工場に動員できるように作られたシステムであるとのこと。労働者の夫を主婦である妻が支える家族の形態は、経営者（資本家）に都合の良いものでした。そのシステムは、その形態に当てはまらない人、例えば「単身者」「子どもを産まない人」「異性愛ではない人」などの社会的な排除、差別が生まれる要因にもなっていると言います。あかた氏は、そこから生まれる「モヤモヤした感情」に目を向けています。今はこの家族形態のシステムも崩れ、夫の給料だけで家族を維持することができなくなっているにもかかわらず、社会の中で理想とされるものだけは変わらずあり、そのズレから生じるモヤモヤした感情が常にあると。小山田氏は、そういうモヤモヤを自分自身も感じる一方で、社会の抑圧を自分が作り出す側になってはいけなと思っていますと語りました。その後、ゲストも参加者も入り混じり火を囲みながら、思い思いに話をしました。日々生活している中でなんとなく感じる、男女や家族にまつわるモヤモヤ感について、色々な思いや考えが聞こえてきました。



【第2回グリーン・マウンテン・カレッジ 参加者数】 60人

第3回：11月17日（土）17：00～20：00（奈良国立博物館 新館西側広場）

「大きな食卓」 チェ・ジョンファ（アーティスト）

小山田 徹（グリーン・マウンテン・カレッジ校長）

今回はゲストに、同日に奈良国立博物館の屋外の通路でワークショップを行った美術家、チェ・ジョンファ氏をお招きしました。チェ氏が、ワークショップで新旧の鍋や皿、お椀、コップなどの食器や食卓を積み重ねた塔の作品「花の舍利塔 Blooming Matrix」を制作したことにちなんで、「大きな食卓」と題して、参加者皆で食べものを持ち寄り食卓を囲みました。冒頭、小山田校長から「今回の試みは、シンプルに、普段それぞれの自宅で晩ごはんを食べているものを、みんなで同じ場所で食べてみないかということです」「食卓を広げると、家族が広がる」「核家族が進む今の日本社会では、複数の世帯から成る拡大家族も少なくなり、幅広い世代で食卓を囲む機会が減っているので、今回は一時それを見知らぬ人とやってみよう」。小山田校長が強調されていたのは、この目の前にあるご飯は「サービス」ではない、ということ。「すべて自己責任で食べるものです。今は他者が握ったおにぎりに抵抗があるという人も増え、誰かが素手で握ったおにぎりを食べることも少なくなり、少しずつ食卓の風景は変わってきています。そういうことも考えながら、皆で食事をしましょう」と挨拶が締めくくられ食事がスタート、一気に大きなテーブルに色々な料理や食材が広がりました。参加者は、大学生、近所の方、前回から引き続き参加された方、たまたまソウルでチェ氏の作品を見たから来たという方、以前からチェ氏の作品のファンだという方など、持ち寄った料理の話などで終始賑やかな食卓になりました。



【第3回グリーン・マウンテン・カレッジ 参加者数】 64人

第4回：12月1日（土）17：00～20：00（ならまちセンター 芝生広場）

「私はどこにいるの？地上編」 佐藤 知久（文化人類学者）

小山田 徹（グリーン・マウンテン・カレッジ校長）

今回のテーマは、「わたし」が存在する場所や関係性について考えてみるということ。境界の地に行きその土地の民族の生活を調査するというイメージがある人類学ですが、佐藤氏はこれまで、ニューヨークのHIV感染者を支援するNPOでのフィールドワークなどをしてられました。佐藤氏によれば、人類学とは、生き物としての人間の仕組みと進化を研究する学問で、文化人類学とは、他の動物よりも暮らしぶりが多様な人間の、その多様性が何を意味しているのかを研究する学問とのこと。その「多様性」「他者」は、遠いところだけで見出すものではなく、近いからこそ無意識だったりする、自分が何を目指していたか、何を欲しているか、それは自分が属している社会や周囲の人、接した情報によって決められる部分が大きいもの。自分の欲望はどこからきたものなのか考えてほしい、と佐藤氏。小山田校長からは、「文化」というのは、自分の生活や所属する業界の中で培われた技術や知識などのスキルが、違う生活や分野で発揮されて残ったもののことではないかというお話がありました。佐藤氏によると、今の狩猟採集民の生活は、農耕民に追いやられて過酷な生活のため、どこでも生きていけるスキルを持っている、それは教わるものではなく、子ども同士の遊びを通じて学んでいくものだそうです。人類学の視点でみた暮らしの中のスキルの話から、それをどうやって周りの人と共有してくのか＝「学び」の話に。時間も空間も長大なスパンで人間を捉えてきた佐藤氏のお話の後には、オーストラリアから来られた参加者も交え薪ストーブの周りで会話に花が咲きました。



【第4回グリーン・マウンテン・カレッジ 参加者数】 57人

第5回：12月16日（日）17：00～20：00（奈良公園 浮雲園地）

「私はどこにいるの？天空編」 磯部 洋明（宇宙物理学者）

松井 紫朗（美術家）

小山田 徹（グリーン・マウンテン・カレッジ校長）

あいにくの雨模様でしたが、二人のゲストの壮大な宇宙の話にテントの中は熱気に包まれました。

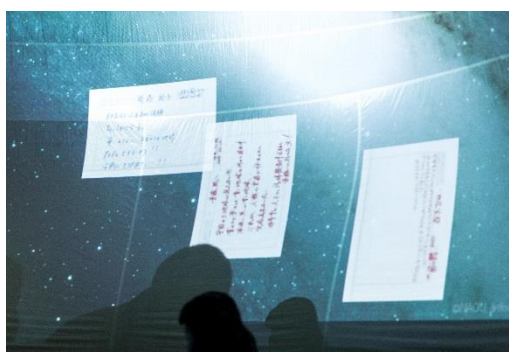
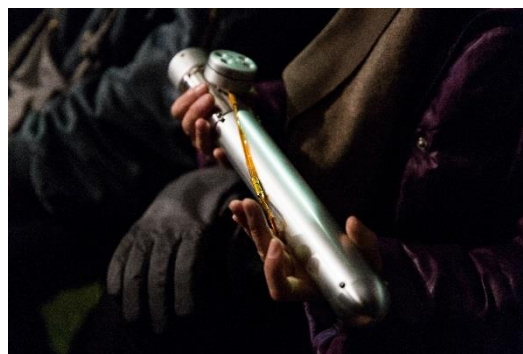
「宇宙からみるわたし」

最初は磯部氏の授業から。宇宙から見て今私たちはどこにいますでしょうか。まずは、オンライン上で宇宙の姿が見られるウェブサイトで“宇宙の果て”までバーチャル宇宙旅行をしました。この画像は現在過去未来の宇宙の姿を見られるのですが、宇宙は膨張しているので、星座の形も5万～10万年もすると形が変わってしまうそうです。宇宙の寿命は173億年、誕生したばかりの138億年前の宇宙は手のひらに乗るくらいの大きさだとか。広大な宇宙の中で、地球は、始め水素とヘリウムだけの世界から混じり物が集まって星が誕生し、色々な生命を育んできました。地球上の生命の祖先は全て同じです。人間を形作る物質が揃ったとしても人間が出来上がるわけではないそうで、磯部氏のお話を聞けば聞くほど生命の不思議さに驚きます。以前、古事記と宇宙をテーマに講演されたことがあるという磯部氏。古事記などの神話も、科学も、私たちがなぜここにいるのかを知りたいがために紡ぐ物語だと磯部氏は言います。宇宙が大好きな男の子からの色々な質問に、磯部氏は一つ一つ丁寧に答えられていました。



「手に取る宇宙—Message in a Bottle」

続いて、松井紫朗氏に、2014年から展開している「手に取る宇宙—Message in a Bottle」というプロジェクトについてお話いただきました。このプロジェクトでは、NASAとJAXAの協力のもと、国際宇宙ステーションの宇宙飛行士が、船外で1本のガラスボトルの蓋を開け「宇宙」を詰めて持ち帰るミッションが行われました。ミッションは2回目に成功、松井氏は、そのボトルを様々な国、様々な人に手に取ってもらい、感じたことを書き留めてもらうことを続けてこられました。実際に体験してみようと、バルーン型のテントに皆で移動しました。中央のテーブルに一人ひとり順番に座り、円筒形のガラスボトルを両手に乗せ、ボトルの中の宇宙を手ひらに感じます。その感じたことを紙に書くと、そのメモはすぐにデータに取り込まれ、バルーンの内側に映し出された宇宙の映像の中に飛んでいきました。メッセージは後日ウェブサイト公開、蓄積され未来の人類に向けたメッセージとして伝えられていきます。実際のボトルを手にした後のテントの中は不思議な高揚感に包まれていました。終了後は、参加者の有志のひとりが珈琲をふるまわれ、はるかかなたの宇宙と自分やまわりの世界について思いを馳せる時間となりました。



【第5回グリーン・マウンテン・カレッジ 参加者数】 34人

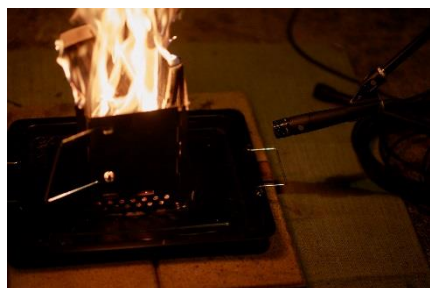
第6回：2月2日（土）17：00～20：00（ならまちセンター 芝生広場）

「耳を澄ます」

sonihouse（鶴林 万平／長谷川 アンナ）

小山田 徹（グリーン・マウンテン・カレッジ校長）

今回のゲストは、新大宮に工房を持ち、オリジナルスピーカーを手がけられている、sonihouse の鶴林万平氏と長谷川アンナ氏。オリジナルスピーカー“scenery”を、広場とテント内に設置し、音楽を背景にお話が展開しました。正12面体の美しい形からなるこのスピーカーの特徴は、一般的なスピーカーが特定の方向だけに音が拡散する「指向性」であるのに対して、「同軸・無指向性」であること。スピーカーが設置された空間のどこにいても、自然な優しい音が耳の周りに聞こえてくるという音響特性を持つそうです。美術大学で絵を描いていたという鶴林氏。キャンバスも自分で作っていたそうで、その木枠や布の張り具合で絵が変わるのだとか。電子音楽も作っていた鶴林氏は、同じようにラジカセやヘッドフォンの違いによって音楽の聞こえ方が変わることから、音空間そのものに興味を持ち始め、行き着く先が無指向性のスピーカーだったそうです。始めは、小山田氏の共同アトリエで制作されていて、木工について色々サポートしてもらったとのこと。小山田氏によれば、これには高い技術が必要で、中の機器を仕込みながら、精確な角度で接合するのは大変な作業だそうです。鶴林氏のスピーカーは世界中の音楽愛好家から熱烈な支持を受け、自宅や店舗やライブハウスに設置されることが多いそうですが、小山田氏は、どこにいても均一に届きやすい、人に優しい音を出すこのスピーカーこそ、病院などの公共空間で設置してほしいと言います。アーティストが命をかけて作っている音を細部までとにかく聴き込むという鶴林氏の言葉は、音への探究心と音楽への尊敬のまなざしが感じられました。



【第6回グリーン・マウンテン・カレッジ 参加者数】 85人

第7回：2月16日（土）17：00～20：00（鳥見“ふらっと”まんま）

「繕う」

柴田 美穂子（洋裁師）

西尾 美也（美術家）

小山田 徹（グリーン・マウンテン・カレッジ校長）

最終回は富雄団地の中にあるコミュニティースペース、鳥見“ふらっと”まんまの協働企画として位置づけていただき、スタッフの皆さんの協力を得ながら実施しました。今回のゲストは、洋裁師の柴田美穂子氏と「古都祝奈良」の美術部門プログラムディレクターでもある西尾美也氏。西尾氏のお話は川西町が貝ボタンの日本一の生産地であることの紹介から始まりました。2つの本を紹介しながら、「色々な想像をかき立てる力がボタンにある」と。男女によってボタンの付ける位置が逆になるなど、ボタンにも様々なルールがありますが、西尾氏の作品《Scramble Clothes》は、服をパーツごとにボタンで付け替えられるように分解して、見知らぬ人同士がパーツを交換し合って服をつくるというもの。そこから、新たなコミュニケーションが生まれていきます。また、同じ服でもボタンの留め方によって違う服になる作品、街なかで見知らぬ人に声をかけて服を交換してもらう作品など、興味深い試みを紹介いただきました。一方柴田氏は、京都で家庭洋裁を学ぶ教室やワークショップを開かれています。ご自身の故郷高松で叔母様がされていた柴田洋裁学院のお話から始まり、その頃は生きていくための洋裁だったと言う柴田氏。「手縫いのものを身につける習慣が少なくなってきた今、洋裁という行為はどうなっていけば良いと思いますか？」という西尾氏からの質問に、「大量生産で作られた既成品だけでなく、一部は手作りしたり、最低限の糸と針の関係を知っておくことや、男女関係なく皆がボタンを自分で付けられるなど、洋裁が良いバランスを探る新しい価値観として立ち上がってきてほしい」と。その後柴田氏に「かんぬき止め」を教わりながら、フェルトにボタンを付けてティッシュケースを作りました。団地の中にある集いの場所でいつもと違った対話空間が生まれ、「グリーン・マウンテン・カレッジ」が締め括られました。



【第7回グリーン・マウンテン・カレッジ 参加者数】 47人

5. 演劇部門について

2016 年制作・初演し、昨年度再演した「ならのはこぶね」の公演を、新たなキャストで行いました。

青少年と創る演劇は、次代を担う若者が創作の過程を演劇のプロとともに経験することで、創造する喜びを体感し、その成果を発信するとともに、地元である奈良を自分の言葉で語ることができる人材の育成を目指すプログラムです。



キャストの約半数が演劇初心者となった今回、学校も学年も違う中高生 21 人が、演劇部門プログラムディレクターである劇作家・田上豊氏による稽古指導のもと、本公演に臨みました。また今回新たな試みとして、クリエイションスタッフを募集し、演出助手、制作、音響担当として 3 人が公演をプロとともに支えました。

3 年度にわたりキャストを変えて演じられたオリジナル演劇「ならのはこぶね」は、ここに集大成を迎えることとなりました。

タイトル：「ならのはこぶね」

作・演出：田上 豊（田上パル主宰）

出演：オーディションに合格した中・高校生 21 人

（中学生女子 8 人、高校生男子 2 人、高校生女子 11 人）

クリエイションスタッフ：公募に応じた中・高校生 3 人

（中学生女子 2 人、高校生女子 1 人）

（1）平田オリザ氏による演劇入門ワークショップ

「東アジア文化都市 2016 奈良市」舞台芸術部門ディレクターであった平田オリザ氏によるワークショップを開催し、10 代から 70 代まで幅広い年代の男女に参加いただきました。

参加者は、これまで平田氏が各地で行ったワークショ



ップのお話を聞き、次々に出されるイメージの共有や円滑なコミュニケーションの理解を深める課題に取り組みました。互いにすぐに打ち解け賑やかに2時間半が終了しました。

本ワークショップは今年度で3度目となりますが、参加者アンケートによると満足度が毎回非常に高く、友人を連れて再び参加された方や、平田氏の教育者としての視点や指導法に興味持つ教育関係者など、演劇関連だけではない様々な市民の方に参加いただきました。



日時：平成30年8月20日（月）18:30～21:00

場所：なら100年会館 小ホール

参加者：一般公募による参加者38人（内、初参加36人）、見学1人

内容：

- ① 平田氏が出した問題に対して、同じ答えを持つ人同士で集まるゲーム
- ② 1～50番までのカードを引き、自分に近い番号の人を探すゲーム
- ③ キャッチボール、長縄跳びのジェスチャー
- ④ ゲーム形式でグループ作りをした後、ロールプレイ
- ⑤ ロールプレイに対してグループ毎に平田氏からの意見やアドバイス

（2）青少年と創る演劇／オーディション

出演者オーディションを2日間にわたり開催しました。他己紹介、参加者同士の仲を深めるワークショップ、ロールプレイ、台本の読み合わせ等を行いました。参加者の中にはこの劇が大好きという前回、前々回の出演者もあり、可否は稽古への出欠等も考慮に入れて決定しました。



日時：平成30年9月22日（土）、23日（日・祝）

14:00～16:00

場所：北部会館市民文化ホール 多目的室1

参加者：一般公募による中高生 19人

（22日18人、23日17人）



（３）青少年と創る演劇／追加オーディションおよび配役発表、事業説明会

出演者追加オーディションを行った結果、新たに１人が合格し、さらに田上氏から主な配役の発表がありました。その後、保護者同席の事業説明会を開催、参加にあたって意欲の確認、留意事項の説明を行い当事業に対する理解と協力をお願いしました。

日時：平成 30 年 10 月 16 日（火）

18:00～19:00 追加オーディションおよび配役発表

19:00～19:50 事業説明会

場所：ならまちセンター 会議室 2、3

参加者：9 月のオーディションに合格した中高生 19 人

追加オーディション参加の高校生 1 人、参加者の保護者 19 組（※欠席 1 組）

（４）青少年と創る演劇／基礎練習

演劇未経験者の参加が多かった今回、稽古に先駆け、基礎を身に付け参加者同士をよく知ることを目的とした 4 日間の基礎練習日を設けました。奈良県内を拠点に活動している脚本・演出家の新居達也氏が指導にあたりました。

日時：平成 30 年 11 月 6 日（火）、13 日（火）、14 日（水）、
16 日（金）18:00～20:00

場所：6 日 奈良市役所中央棟 6 階 正庁

13、14、16 日 奈良市役所 第 6 北会議室

参加者：19 人

内容：名前を覚えるための様々なゲーム、腹式呼吸の練習、
ジェスチャーゲーム、イメージ共有のためのゲーム、
短いストーリーの創作と発表



（５）青少年と創る演劇／稽古

今回の稽古は過去２回と比べて最も短い１１日間となりました。

配役は出演者それぞれの個性に合わせて決められましたが、出演者１人の辞退もあり、劇中重要な役割を担う２キャストが最後まで未決定でした。２日目、２０１６年公演に出演した１人と演劇部経験者１人が新たに合流し、２１人のキャストが全員揃って本格的に稽古がスタートしました。

田上豊氏と殺陣師の福田健二氏による指導は、田上氏曰く“プロに行うのと同じくらい”密度の濃いものでした。連日放課後から夜まで続く盛り沢山の内容の中、経験者が初心者を導き初心者もアイデアを出して、皆で作品を創り上げていきました。それぞれが切磋琢磨し日々上達していく成長ぶりは目を見張るものがありました。



稽古５日目には今回

初めて募集したクリエイションスタッフ３人も揃いました。演出助手、制作、音響と希望はそれぞれでしたが、稽古期間中はセリフの読み合わせや欠席キャストの代役を務めるなど、舞台の骨格作りを担いました。

また今回、帝塚山学園高校放送部よりドキュメント制作の取材依頼があり、録音機材を抱えた放送部員たちが稽古場で田上氏や出演者たちにインタビューを行いました。

公演３日前より、稽古場は本公演場である市民ホールに移りました。最初に田



上氏は皆を客席側に連れていき、まず舞台の大きさを確認させ、それからいよいよ、最終仕上げとなる舞台稽古がスタートしました。衣装を着け、ライティングや音響

も入ると皆の顔は引き締まり、何度も動きや立ち位置、衣装替えなど確認を繰り返しました。公演前日にはゲネプロ（本番同様のリハーサル）を行い、本公演に来られない家族の方も観覧しました。

日時：平成３０年１２月１１日（火）～１２月２２日（土）の間の１１日間

場所：ならまちセンター多目的ホール・市民ホール、音声館ホール

(6) 青少年と創る演劇／「ならのはこぶね」本公演

12月23日、ならまちセンター市民ホールにて、青少年と創る演劇「ならのはこぶね」を上演しました。

ホワイエでは過去の公演の様子や、今回のオーディションから続く稽古風景をパネルやスライドで紹介し、参加者の成長の過程を多くの観覧者に見ていただきました。

本番公演が始まると、出演者全員が稽古の成果を存分に発揮し、躍動感ある動きとはっきりしたセリフ回しで堂々と演技して、観客を80分間の物語世界へといざないました。

ほぼ満席の観客からは大きな拍手をいただき、ダブルコール※となって終演を迎えました。



(※ダブルコール：鳴り止まない拍手に出演者が再び舞台上に戻ること)

日時：平成30年12月23日(日・祝)

14:00~15:20 (受付開始 13時／開場 13時30分)

場所：ならまちセンター 市民ホール

入場料：無料(当日券を13時より受付)

観覧者数：246人

スタッフ：作・演出 田上 豊(田上パル)

演出助手 福田 健二

舞台監督・美術 ニシノトシヒロ(BS・II)

舞台監督補佐 北方こだち

音響 廣岡 美祐(劇団「劇団」)

照明 加藤 直子(DASH COMPANY)

映像 吉光 清隆(PLAYSPACE)

衣装 山口 夏希

当日運営 三坂 恵美(観劇三昧)

スペシャルサンクス 新居 達也、井上 大輔、中村 恵

奈良県高等学校演劇研究会

あらすじ : ときは、現代。学校で奈良（平城）時代の考察、再発見を促された高校生。教科書を地図代わりに読み進めて行くも、歴史に余白が多く実感に辿り着けない。劇化し発表することを指示された今、実感なしでは作品なんか無理！と大混乱。学年発表はもう近い！となりのクラス「平安時代」は豪華絢爛。焦りに焦る「平城」クラス。よりによってキーパーソンの鑑真役はずっと学校来てないし、クラスの仲も良くないし、どうなっちゃうの、私たち。歴史の海に漂い、小舟で浮かぶ高校生達。私たちは、遣唐使。時代をまたぐ遣唐使。きっと戻ってきてみせる。高校生たちの歴史の冒険が、航海が、今始まる。

キャスト :	生徒 1 万徳 充穂	生徒 2 植村 真央
	生徒 3 政清 亜季	生徒 4 松本 亜依
	生徒 5 太田 裕佳	生徒 6 片山 真奈
	生徒 7 上野 夏鈴	生徒 8 田辺 美海
	生徒 9 依藤 日向	生徒 10 坂田 朋哉
	生徒 11 山田 莞爾	生徒 12 松下 奈央
	生徒 13 桐畑 風沙	生徒 14 桐畑 美里
	生徒 15 岡山 弥美	生徒 16 浅田 玲子
	生徒 17 吉田 らら	生徒 18 阪田 日和
	生徒 19 村井 萌	日本史の先生 山村 愛莉



(7) 青少年と創る演劇／成長のふりかえり

今回参加者には、自らの課題の克服、成長・変化を意識しながら、稽古から舞台公演への挑戦に取り組むことを期待して『自己チェックシート』の記入をお願いしました。すぐに大きな変化はなくても、そこに何か将来に繋がる気付きが認められるか等も含めて、スタート編とゴール編、前後2回に分けて内容を確認しました。

スタート編はオーディション後に配付して10月の事業説明会で回収、これから始まるチャレンジにあたり自身が克服したい課題、またその時点での奈良を好きと思う気持ちをパーセントで表してもらいました。参加理由については約40%が「挑戦・成長」と記し、次に「プロの指導が魅力」と答えており、また自身の課題については約半数が「消極性を直したい」としていました。

そして2か月後、公演終了後に記載したゴール編では70%が「達成感・満足感」を感じ、4段階で選択する課題の変化については98%が「変化がある・少し変化がる」として、「コミュニケーション力が向上した」「主体性・積極性が高まった」と答えました。さらに奈良を好きと思う気持ちの変化は平均10%の上昇を見せ、「奈良の歴史に興味を沸いた」「奈良にもっと関わりたい」との積極的な意見が多数を占める成果を確認しました。



6. 事例発表と意見交換会 ～わいわい語ろう アート de 奈良～

平成 30 年度に市内で実施されたアートの取り組みを実施団体が報告しあうことによって課題を共有すると共に、これからの連携の可能性を探り、市民の参加者とともに奈良のこれからのアートについて展望を語り合うために実施しました。

当日は、各団体が開催しているアートプロジェクトの事業目的や内容の発表ののち、発表者、参加者を交えての意見交換を行いました。次世代を担う青少年にアートに親しんでもらうことの重要性や方法について、様々な意見があがりました。

日時 : 平成 31 年 3 月 17 日 (日) 14:00～15:30

場所 : 奈良町にぎわいの家

主催 : 奈良市

奈良市アートプロジェクト実行委員会

奈良町にぎわいの家管理共同体

(構成団体: 公益財団法人奈良まちづくりセンター／特定非営利活動法人さんが俤座／なら・町家研究会)

学園前街育プロジェクト実行委員会

参加数 : 23 人

《事例発表》

①奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」より～アートへの挑戦～

奈良市アートプロジェクト実行委員会事務局

美術部門プログラムディレクター 西尾美也氏

奈良市アートプロジェクト実行委員会事務局が、2016 年に実施した「東アジア文化都市 2016 奈良市」で奈良市が現代アートの発信と日中韓の交流事業に取り組んでから、その成果を活かした事業を美術部門と演劇部門の二本立てで 2 年間実施してきた経緯や、課題と今後の展開について説明。

その後、美術部門プログラムディレクターである西尾美也氏が、「古都奈良に暮らす人々の生活＝アートを祝福する花と種火」と題し、二年間の美術部門の事業報告を行った。特に今年度新たに実施した対話のプログラム「グリーン・マウンテン・カレッジ」のめざすところは、「学び合い」を通じた根源的な生きる技術としてのアートであることが語られた。

②奈良町にぎわいの家より～町家発アート～

奈良町にぎわいの家管理共同体事務局
総合プロデューサー おの・こまち氏

奈良町にぎわいの家の指定管理を行っている同管理共同体事務局が、施設全体のコンセプトが「奈良のこれからのライフスタイルを提案する」「世界中にならまちのファンを作って、日本の生活文化の首都にしたい」を掲げて施設の運営を行っていることを説明。

その後、にぎわいの家の総合プロデューサーおの・こまち氏が、展示企画の趣旨について説明を行った。現在展示企画は

1. 現代アートに特化した、つし二階アート企画
2. 町家美術館企画
3. 蔵展示

の3本柱で実施している。それぞれの項目ごとに、いままでの展示の紹介を行った。にぎわいの家は美術館ではないが、地元の様々な方々の協力を得て、誰もが参加しやすい展示を心がけていることが語られた。

③学園前アートフェスタより～地域が育むアート～

学園前街育プロジェクト実行委員会事務局
総合プロデューサー一般社団法人はなまる

学園前街育プロジェクト実行委員会事務局が、何故学園前が街育アートを行おうとしたのかについて説明した。学園前という一等地といわれた地域にも、例外なく少子高齢化の波が押し寄せている。この街をアートによって町をもう一度盛り上げようと、住民が主体となって始めたのが学園前アートフェスタ。住民同士のコミュニケーションが深まり、街の体感温度が上がった。多くの住民がボランティアとしてこの事業に関わっている様子を映像で紹介した。

その後、この事業の総合プロデュースを担当した総合プロデューサー一般社団法人はなまるの飯村有加氏が企画について説明を行った。現代アートはわからないという声も多いが、それでも敢えて何故この手法をとっているのか、現代アートという手法を地域に入れて自分たちが何を徳たいかを考えて企画を行っていることが語られた。

それぞれの報告の後、参加者からは「中高生にとって美術、とりわけ現代アートには距離がある。子どもたちがスポーツや音楽に夢中になれるように、美術にも夢中になれる場所があって欲しい」「次世代市民となる中高生が参加できる手立てがあればよい。」などの意見が出されました。

7. 広報活動について

■ 広報コーディネートについて

本事業の広報活動については、リレーリレーにコーディネートを依頼し、フライヤーやSNS等にて行いました。

■ 広告物

- ・ フライヤー（平成30年10月10日から配布開始）
仕様：A3サイズ カラー両面 二つ折り
内容：アート展示、演劇プログラム開催について
部数：15,000部
（主な配布先）
市関係施設／美術館・美術団体等／報道関係／大学・高校・中学等／
アート関係団体／イベント関係者配布／会場設置／関係者・出演者等／その他
- ・ のぼり旗13本、ポスター100枚
のぼり：各プログラム会場にて掲出
ポスター：市内文化施設等

■ インターネットを利用した広報

- ・ Facebook
フォロワー数（平成31年3月現在）：3,031件
投稿数：58件
Facebook 広告：4件
- ・ Twitter
フォロワー数（平成31年3月現在）：800件
ツイート数（リツイート含む）：136件
- ・ Instagram
フォロワー数（平成31年3月現在）：140人
投稿数：15件
- ・ WEBサイト：奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」
<https://kotohogunara.jp/>（平成30年9月に公式サイト開設）

■ プレスリリース・メールニュース

- ・ 市長定例記者会見 平成30年9月25日
美術部門プログラムディレクター西尾美也氏同席のもと、市長会見を行った。

- ・ 市政記者クラブ、県文化記者クラブ 報道資料提供
美術部門 4 件／演劇部門 4 件
- ・ メールニュース
アート関係者や報道・メディア等に 2 回（企画発表時と演劇観覧募集等）メールでのリリースを行った。

■ メディア等掲載

掲載日	掲載物	内容
平成 30 年 9 月 4 日	朝日新聞	平田オリザさん 奈良で入門ワークショップ
平成 30 年 10 月 5 日	朝日新聞	専門家と市民「対話型アート」
平成 30 年 10 月 13 日	読売新聞	市民参加アート空間
平成 30 年 10 月 14 日	奈良新聞	焚き火を囲んで学ぶ 対話型アートプログラム
平成 30 年 11 月 24 日	朝日新聞	日用品 アートに昇華 芸術家と市民で塔制作
平成 31 年 3 月 18 日	毎日新聞	気軽にアート楽しもう

※報道資料については、広報戦略課を通じて PRTIMES に掲載

■ 演劇プログラム作成（当日配布用）

A4 白黒 4 頁 300 部印刷（会場にて配布）

■ しみんだより

- 9 月号：「古都祝奈良 2018-2019」企画概要
- 10 月号：「古都祝奈良 2018-2019」プログラム紹介（1 ページカラー記事）
- 11 月号：「古都祝奈良 2018-2019」11 月～12 月のプログラム
- 12 月号：「古都祝奈良 2018-2019」12 月～1 月のプログラム
- 1 月号：「古都祝奈良 2018-2019」1 月～2 月のプログラム
- 2 月号：市政ニュース 青少年と創る演劇「ならのはこぶね」上演

■ プロモーション動画等

- ・ 奈良市動画チャンネル「奈良市ニュース」
 - ◇ 奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良 2018-2019」開催（平成 30 年 10 月 5 日公開）
 - ◇ 奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」美術ワークショップを開催！（平成 30 年 11 月 22 日公開）
 - ◇ スポーツもアートも演劇も！12 月のイベント特集（平成 30 年 12 月 7 日公開）
 - ◇ 青少年と創る演劇「ならのはこぶね」上演！（平成 31 年 1 月 11 日公開）

■ ならまちセンターPR ブース

平成 30 年 11 月 15 日から平成 31 年 2 月 25 日まで、ならまちセンターのエントランスホールにおいて奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良 2018-2019」の PR 用パネルの掲出等を行った。



<広報関係写真>



市長定例記者会見



「古都祝奈良」公式サイト



のぼり



チラシ

8. 検討と課題

■事業全体について

本プロジェクトは、「東アジア文化都市 2016 奈良市」の1年間のレガシーをつないでいくために始まったものである。これを将来継続的に奈良市の文化政策の重要な柱として実施していくためにも、中長期的な展望に基づき、「奈良市文化振興計画」の中に位置づけ、定着させていく必要がある。

2年間は東アジア文化都市事業のカテゴリー3部門（美術・舞台芸術・食）のうちの2部門を踏襲して、美術部門と演劇部門で構成してきた。それぞれワークショップや演劇創作など、参加型プログラムを実施してきた。引き続き、青少年をはじめとした人材育成につながるプログラムを展開していきたい。

また、本プロジェクトはこれまで奈良市の文化政策を担ってきた文化施設との連携が希薄である。事業展開の会場として文化施設を使うだけでなく、施設の指定管理者と事業趣旨を共有し、協力できる体制を作る必要がある。

■美術部門について

①チェ・ジョンファ氏の作品制作ワークショップ・展示

作品制作のワークショップについては事前の広報により、チェ氏のファンなど情報を得て参加された方が一定数あったが、全体的に見ると子ども連れなどの通りすがりの人が多かった。参加された方には創作の楽しさを感じていただくことができた一方、全ての参加者に作品のテーマや事業趣旨を理解していただくことには困難さがあった。

チェ・ジョンファ氏のワークショップは11月に行われた第69回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会・奈良大会に照準を合わせるとともに、小・中学校でのアウトリーチを実施できるよう連携を試みたが、学校の行事計画が決定後であったため、実現しなかった。しかし保育園でのワークショップは、チェ氏との触れ合いの中で子どもたちの創造力を引き出すことができた。このような取り組みを学校や幼稚園などと連携して行うためには、教育委員会との一層の連携が求められる。

②グリーン・マウンテン・カレッジ

アートプロジェクトとして対話のプログラムを実施したが、初めての試みであったため趣旨を理解していただくことが難しい面もあった。しかし、「学び合い」の場として位置づけることによって、日頃はアートに関心がない人も参加しやすいプログラムとなった。アートプロジェクトの新たな境地を切り開くためには、今後もこのような形の「学び合い」のアートプログラムを定着させ、人材育成につなげていくことが必要である。

■ 演劇部門について

今回の青少年と創る演劇「ならのはこぶね」は、これまでにない最短の稽古期間であったが、作・演出家であり演劇部門プログラムディレクターの直接指導により、集大成にふさわしい舞台となった。

今回初めて募集したクリエイションスタッフ 3 人（中学生 2 人、高校生 1 人）が公演を支えたが、小屋入りしてからはプロの仕事を間近で見る機会があったものの、企画自体がすでに事業が動き出してからのスタートであったため実務に携わることが十分とはいえなかった。次回は企画内容の進め方を再考する必要がある。

昨年度、参加者と保護者で稽古日程が共有できておらず出欠管理が不十分であった反省を踏まえ、オーディションで合格した全ての参加者とその保護者に対して説明会を催し、事業への理解と協力を得ることができた。円滑な運営には欠かせない催しとして次回も継続していきたい。

さらに参加者には『自己チェックシート・スタート編／ゴール編』を基礎練習前の 10 月と、公演終了後 12 月に記入してもらった。これにより、多くの参加者よりコミュニケーション力や主体性・積極性の向上の自覚、また奈良の歴史に興味を沸いたとする地元奈良への思いの高まりを確認できた。また今回、4 人が参加してくれた帝塚山学園高校より、放送部のラジオドキュメント制作の協力依頼を受け、稽古場でインタビューを受けた参加者からは、改めて自らの経験を客観的に眺めることができたとの意見が聞かれた（※帝塚山学園高校放送部はこのラジオ作品で第 35 回奈良県高等学校放送コンテストの最優秀賞を獲得した）。これらの取り組みにより、参加者が事業中・事業後に自らの経験を客観視する機会を設けることで、何らかの気づきを得る一助となることが確認できた。次回もこのような取り組みをさらにブラッシュアップして進めていきたい。

次回に向けては、「公演に出演するだけでない事業」という事業後の展開も見据えたプログラム編成や参加者への意識づけ、そのための学校や教育委員会への働きかけや協力体制の構築が必要になる。また、それぞれの局面で、より多くの人を巻き込む工夫についても並行して考えていく。

■ 事業の評価について

事業評価に当たっては、アンケートの集計結果が有効ではあるが、アンケートに答えてくださる参加者はもともと本事業に対して好意的な方が多い。このため、集計結果の傾向をそのまま評価に反映させることはできない。事業に対する正確な評価を得るための手法が必要である。

《資料編》

(1) 平成 30 年度事業 参加者数等まとめ

■ 全体

参加者数

美術部門	11,202 人
演劇部門	309 人
計	11,511 人

属性（アンケート結果より）

性別		◎備考；アンケート総数／337 件 ※事業参加者全体(アウトリーチ除く)のおよそ 3 %						
男性	29 %							
女性	69 %							
未記入	2 %							
年齢								
10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代以上	未記入
25 %	7 %	14 %	21 %	13 %	10 %	7 %	1 %	1 %

■ 美術部門 内訳

① チェ・ジョンファ作品制作ワークショップ・展示 参加者数

内容	人数
奈良国立博物館 作品制作ワークショップ	341 人
作品展示：奈良国立博物館	1,916 人
作品展示：なら 100 年会館	8,524 人
富雄保育園 アウトリーチワークショップ	24 人
計	10,805 人

② グリーン・マウンテン・カレッジ 参加者数

第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回	計
50 人	60 人	64 人	57 人	34 人	85 人	47 人	397 人

■ 演劇部門 内訳

内容	人数
平田オリザ氏によるワークショップ	38 人
出演・クリエイションスタッフ オーディション、稽古	25 人
ならのはこぶね 観覧	246 人
計	309 人

延べ 408 人

(2) 平成30年度事業計画

奈良市アートプロジェクト

事業計画

平成30年5月

奈良市アートプロジェクト実行委員会

《平成 30 年度「古都祝奈良2018-2019」事業計画》

奈良市は平成 28 年度に国家プロジェクト「東アジア文化都市 2016 奈良市」の開催都市として、年間を通じて様々なアートプログラムを展開し、奈良市の「場の力」を内外に発信した。

平成 29 年度はその成果を受け継ぐ事業として、奈良市アートプロジェクト実行委員会を立ち上げ、アートの力で地域の社会課題を掘り下げていくために、奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良 2017-2018」を実施した。

平成 30 年度は、「古都祝奈良 2017-2018」で問題提起された内容を踏まえるとともに、引き続きプロジェクトの質を高め、より多くの市民が参加できる事業として実施する。

基本的な考え方

- ・平成 30 年度の事業タイトルは「古都祝奈良 2018-2019」とする。
- ・平成 29 年度に引き続き、事業構成は「美術部門」と「演劇部門」とし、プログラムディレクターを「美術部門」は西尾美也氏、「演劇部門」は田上豊氏とする。
- ・「東アジア文化都市 2016 奈良市」を契機に始まった、中韓のパートナー都市との青少年交流事業「東アジア文化創造 NARA クラス」（奈良市主催）に協力する。
- ・奈良市教育委員会との調整により小・中学生が事業に参加しやすいスケジュールや学校へのアウトリーチ活動の検討。例えば、11 月に市内で開催される中高美術教諭全国大会との協力も含めて教育委員会との連携を強化する。



事業の展開方法

(A) 美術部門

(1) チェ・ジョンファ氏とのプロジェクトの継続

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良 2017-2018」の参加アーティストであったチェ・ジョンファ氏は、昨年度の創作活動を通じて奈良市の文化的なポテンシャルの高さを強く意識された。またアートディスカッションの中でも、チェ氏から奈良での芸術の可能性や奈良市へ愛着を感じていること等、熱い思いも語られた。このように国際的なアーティストであるチェ氏が、奈良市を舞台として創作意欲を持ち続けていることは、本市がアートプロジェクトに取り組んでいく上で得難い要素である。

今年度もチェ氏を招へいし、彼の作品制作に対する考え方をテーマに据えて、彼の奈良での表現をもう一段階深める。

(2) 日常生活の場に継続的に“ある”ようなアートプロジェクト

アメリカで実施された「ブラック・マウンテン・カレッジ」という伝説のスクールに着想を得て、寺子屋や市民大学のようなアートスクール「(仮称) グリーン・マウンテン・カレッジ」を実施する。(平成 29 年度実施したアートディスカッション参加者小山田徹氏の発案。ネーミングは若草山の緑をイメージ。)

具体的には「ワークショップ」と「アートディスカッション」の要素を兼ね備えたもので、講師としてのアーティストが出す課題を参加者とともに考える。プロセスを重視した、年間を通じた継続的なプロジェクトであり、その過程を作品として捉えることもできる。

(B) 演劇部門

(1) 青少年と創る演劇「ならのはこぶね」の継続

「東アジア文化都市 2016 奈良市」からの継続事業。次代を担う青少年が創作の過程を演劇のプロとともに経験することで、創造する喜びを体験し、その成果を発信するとともに、ふるさと・奈良を自分の言葉で語ることができる人材育成を目的とする。今年度も演劇部門プログラムディレクターで、劇作家の田上豊氏とともに、中学生・高校生の出演者とともに、新たな「ならのはこぶね」の創作に取り組む。

また、今後この作品をどのように継続させていくのか、これからの展望についても考える。

(2) 平田オリザ氏による市民を対象としたワークショップ

劇作家であり、教育者でもある平田氏のワークショップは、幅広い世代の市民が演劇の手法を用いて、新たな自分の発見やコミュニケーション能力の獲得へと巧みに導く内容が大変好評である。今回のワークショップの開催を通じて、奈良市アートプロジェクトの可能性を体験する機会を提供する。

